

城南高校

大学と連携 環境充実

城南高は2003年度から、理科教育に重点を置く文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール」に指定されている。充実した環境による実験や実習、徳島大、鳴門教育大、徳島文理大などと連携した研究や授業が行われている。

「研究者の生活は大変だと思うけれど、好きなことなら徹夜してでも続けられそう。私も社会に役立つような研究がしたい」。片岡あいさん(16)＝応用数理科1年＝は、小保方さんのニュースに声を弾ませた。大学から大学院へと進み、将来は研究者になるのが夢だ。今は遺伝子に興味を抱いている。

小学生のころから理科が好きだった。中学校で、ミドリムシが植物と動物の特性を併せ持っていることを学び、感動を覚えた。その後、体をどんなに切断しても再生できる不思議な生き物「プラナリア」を知り、あらためて「生物って面白い!」と感じた。

ミドリムシやプラナリアへの関心は今も持っているが、さらに、高校に入って深く学んだ遺伝子にも興味を抱くように。「遺伝子は未解明のことが多い。調べがいがあり、魅力的」と目を輝かせる。

生物の授業を受け持つ藤田康平教諭は「応用数理科の女子生徒は、知らないものに対して一歩踏み出す前向きな姿勢が見える」と感心する。

しかし、生物の実験や研



城南高校応用数理科の女子生徒たち＝徳島市の同校

「生物って面白い!」

究をするには、女子が苦手ではないかと思われることに取り組む必要もある。一宮由佳さん(17)＝同科2年＝は課題研究の授業で、アマガエルの吸着性と退色変化について調べた。カエルの餌は生きたコオロギ。育てて増殖させなければならない。

一宮さんは「カエルに触るのは平気だけれどコオロギは苦手。ゴキブリみたいで気持ち悪い。次第に慣れたけれど、大きいのは友達に任せた」と苦笑。ただ、藤田教諭は「男子に比べ実験動物の世話が丁寧」と、リケジョを評価する。

一宮さんは4人のグループでその研究を行い、重さの異なるアマガエルの吸盤をガラスや木材、網などに

くっつけて傾け、どの素材に対する吸着性が高いのかを調べた。当初は7匹いたカエルが死んでしまって最後は3匹になるなど、うまく結果が出ないこともあったが、体重の重いカエルと軽いカエルで差がないのが木材だと分かった。

「アマガエルは、英語で『tree frog(樹上性のカエル)』と言われる。その名前の通り、カエルにとって一番過ごしやすいのは木なのでは」と、一宮さんは分析する。

その研究を終えた今、次のテーマは未定だが、「生き物に対する耐性はついたけれど、世話は大変だと身に染みた。次の研究にはカエルは選ばないかもしれない」と笑った。

輝く徳島のリケジョ